

論文

まちバルの事業モデルと地域環境への適応 ーバルフェスタいばらきの事例を中心にー

葉山 幹恭
所員
Mikiyasu HAYAMA

1. はじめに

函館西部地区バル街が始まって以降、伊丹まちなかバルなど、様々な地域で同様のフードイベント（以下、「まちバル¹⁾」）が実施されるようになった。実施されたまちバルが続かず数回の開催で終了してしまう場合もあるが、本稿の調査対象とした「バルフェスタいばらき」は2011年よりスタートし、2022年に11回目の開催を迎えるなど、多くの地域で継続して行われるイベントとなっている。このことから、まちバルはフードイベントとして様々な地域で成功した事業モデルであると言える。しかし、飲食店の業種や業態、店舗数、客層などは地域ごとに状況が異なるため、それぞれの地域で同様のまちバルを実施する場合、その地域の事業環境に適応させていく必要がある。もしくは自然的に環境に適応したイベントへと変化していくと考えられる。

本稿では、まちバルの先行事例である日本において、はじめて当該形式のイベントが行われた函館西部地区バル街とそれに次いで実施されたイベントである伊丹まちなかバルについてその形態を事業モデルとして整理し、バルフェスタいばらきの事業モデルと比較することで、まちバルの事業モデルが地域の環境に対してどのような影響を受け、どのように環境適応されているのかを考察していく。

2. まちバルの事業モデル

前述のとおり、本稿の調査対象はいばらきバルであるが、全国各地で行われている多くのまちバルは、先行事例である函館西部地区バル街、それをヒントに行われた伊丹まちなかバルを参考としている。ここでは、

この2事例がどのような事業モデルであるかを整理していく。

2-1. 函館西部地区バル街

函館西部地区バル街は2004年に函館市で開かれた「2004スペイン料理フォーラム in HAKODATE」という国際会議に合わせて行われたイベントが始まりとなっている。翌年からはフォーラムの開催に合わせた特別なイベントという形式ではなく、継続的なイベントとして春と秋の年2回実施されるようになった²⁾。なお、2019年9月に行われた第32回の開催より以降は「コロナ禍」であることから開催中止が続いている。そのため、ここでは第32回の実施内容をもとに分析する。

函館西部地区バル街の公式情報をもとに事業モデルを図で表すと図1のようになる。

函館西部地区バル街の特徴として挙げられるのは、まず企画から運営までを担っている実行委員会が有志のメンバーで構成されている点である。函館西部地区バル街実行委員会(2021)のなかで実行委員会メンバーの田村昌弘氏もニュースレターのなかで「イベントの運営組織の中心は商工会議所や商工会、または商店街やまちづくり系の三セク会社などで、公共的団体が裏方を務める場合が多いようだ。函館のように飲食店主などの有志が運営を担っているものはむしろ少数である。」と述べられている³⁾。なお、後述する伊丹まちなかバル、バルフェスタいばらきについても、ともに実行委員会とは別にイベントを運営する組織が存在している。

次の特徴としては、参加店舗に関する部分である。函館西部地区バル街には参加する宿泊施設が6軒あり

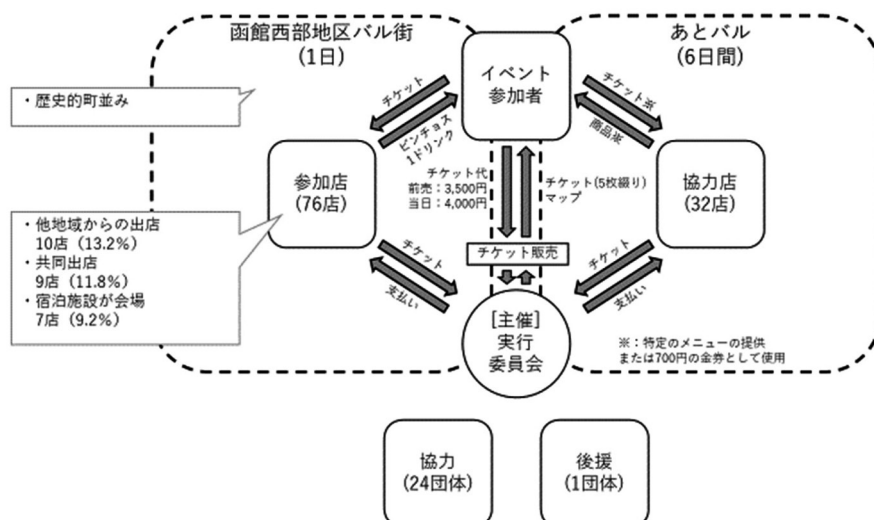


図1 函館西部地区バル街の事業モデル

公式情報をもとに筆者作成。

参加店としては7店の登録がある。これは函館市が観光都市であることの特徴が出ている部分であり、後述する2つのまちバルでは見られない強みである。また、それに加えて函館の歴史的町並みや参加店舗としても登録されている「青函連絡船記念館摩周丸」も地域の観光資源がまちバルと組み合わせられている点も特徴と言える。

そして、その他にも既存の飲食店の出店だけではなく、飲食店の一角を借りての出店や、飲食店以外の施設を使つての出店などがある点、特別参加として他地域のまちバルから参加している点なども後述のまちバルには見られない特徴である。

2-2. 伊丹まちなかバル

伊丹まちなかバルは前述の函館西部地区バル街をヒントにまちの活性化を目指したイベントとして2009年に始まった⁴⁾。函館西部地区バル街と同様に春と秋の年2回開催されていたが、こちらも函館西部地区バル街と同様にコロナ禍により2018年10月の実施より以降、開催を中止する期間が続いた。

伊丹まちなかバルについては2022年10月にイベントが再開されており、ここではこの2022年10月に行われた第27回の実施内容をもとに考察していく。

伊丹まちなかバルの公式情報をもとに事業モデルを図で表すと図2のようになる。

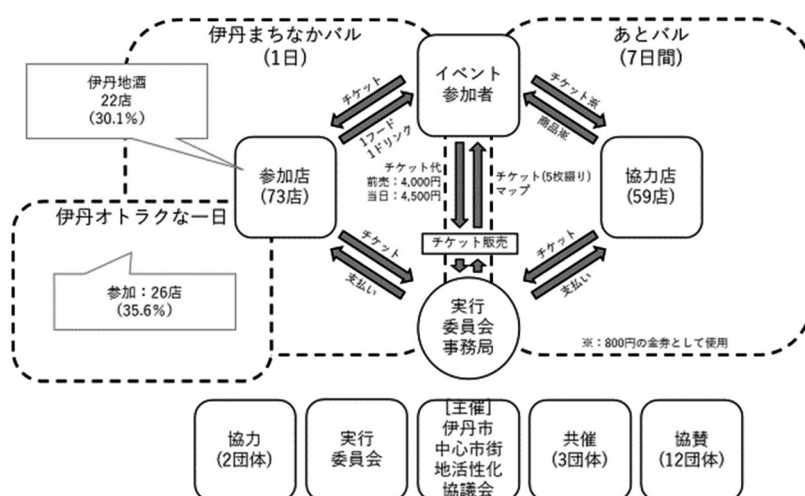


図2 伊丹まちなかバルの事業モデル

公式情報をもとに筆者作成。

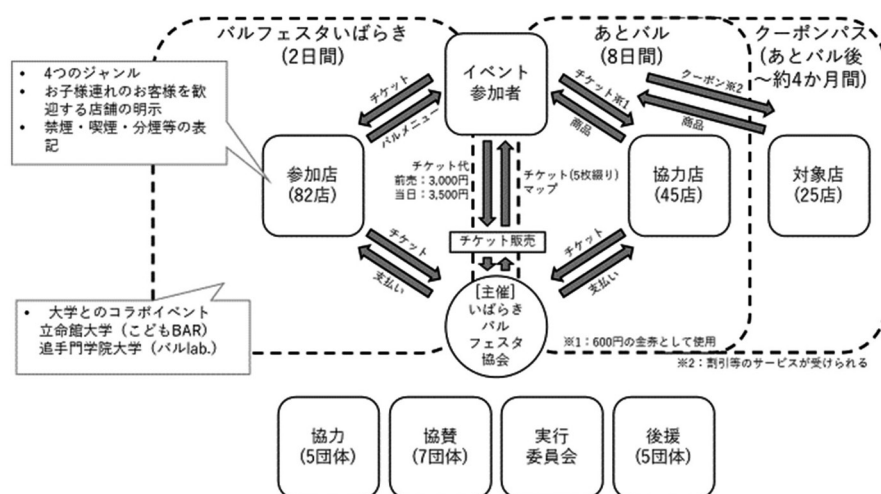


図3 バルフェスタいばらきの事業モデル（2019年「第8回」）

公式ガイドブックおよびインタビュー内容をもとに筆者作成。

伊丹まちなかバルの特徴として挙げられるのは、まず地酒を前面に押し出している点である。伊丹市は「清酒発祥の地」でとされている地域であり、市内には現在も醸造元が2社ある⁵⁾。そのうちの1社の小西酒造株式会社ではクラフトビールも製造されており⁶⁾、これらの地元で作られたお酒をイベントで提供する店舗に対し「伊丹地酒」というアイコンがガイドマップやホームページ上の店舗紹介に付けられている。伊丹地酒のアイコンがある店舗は参加店の73店中22店である。

そして、次に特徴として挙げられるのが「伊丹オトラク」である。伊丹オトラクは地域のカフェやバーで行われている音楽ライブの情報を発信する目的で2005年につくられた音楽プロジェクトである。伊丹まちなかバルがスタートした2009年より、伊丹まちなかバルとの連携企画として「オトラクな一日」というプロジェクト名でイベントが実施されるようになった。伊丹まちなかバルの参加店に「ミュージシャンとサポーターの皆さんとでチームを40組ほど結成し、各お店を「流し」のように演奏して渡り歩く」とプロジェクトの紹介に記されている⁷⁾。伊丹地酒同様に参加店舗にはガイドマップ、ホームページ上にアイコンとして「オトラク」のアイコンがつけられる。2022年10月の伊丹まちなかバルでオトラクのアイコンがある店舗は73店中26店であった。

3. バルフェスタいばらきの事業モデル

バルフェスタいばらき（以下、「いばらきバル」）は2012年より開始された大阪府の茨木市のまちバルであ

る。函館西部地区バル街から始まり、伊丹まちなかバル、そして同様のイベントは様々なまちに広がっていった。角谷（2016）は伊丹まちなかバルの開催に合わせて実施されている「近畿バルサミット」の開催により、他地域へ情報伝達されたと述べている⁸⁾。これら各地まちバルによる地域おこしの動きに影響を受け、茨木市内でのまちバルが企画されるに至った。なお、いばらきバルに関する内容についてはガイドブックなど公式情報のほか、いばらきバルの主催であるいばらきバルフェスタ協会へのインタビュー（2022年8月2日実施）をもとにした内容である。

いばらきバルは先行事例として述べている2事例とは異なり、コロナ禍においても開催中止とせず、イベントの実施方法を変更することで継続しての開催を実現している。しかし、実施方法が先行事例と大きく異なるため、この節では変更前の2019年に行われた第8回の実施内容をもとに考察していく。なお、いばらきバルについては、年2回開催されている函館西部地区バル街、伊丹まちなかバルと異なり、年1回開催されているイベントである。

いばらきバルの公式ガイドブック⁹⁾およびインタビュー内容をもとに事業モデルを図で表すと図3のようになる。

いばらきバルの特徴として挙げられるのは、まず店舗が4つのジャンル（名称は「バル・ジャンル」）に分けられている点である。ジャンルは「飲食バル」「カフェバル」「お土産バル」「ナイト・プレイバル」という名称になっている。それぞれの内容は以下の通り。

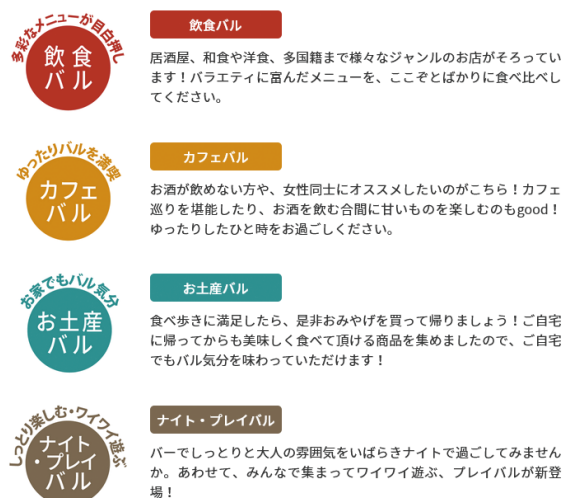


図4 いばらきバルの「バル・ジャンル」

バルフェスタいばらきホームページ

この4つのジャンルが設けられている目的は「お酒が飲めない方や、お子様のいるご家族連れの方でも楽しんでいただけるように」と公式情報に記載されている。また、このジャンル分けにも関連するが、店舗紹介には「お子様連れのお客様も歓迎する店舗」を示すマークや、「禁煙」「喫煙」「分煙」「時間別喫煙」の4つに分けて店舗のたばこに対する対応を表示するなど、一般的なまちバルが対象とする参加者とは異なったターゲットも含まれていることがうかがえる点が特徴である。

次の特徴としては開催が2日間となっている点である。函館西部地区バル街と伊丹まちなかバルは1年に2度開催されるが、1回の開催日数はどちらも1日である。期間の長さについては、2019年が特別な設定ではなく、2014年、2015年、2017年、2018年については3日間とさらに長い期間の開催となっている。また、開催期間に関連した特徴としては、あとバルのそのまた後に「クーポンパス」という制度が設けられている点である。クーポンパスはチケットの半券に印刷されたクーポンをクーポンパス参加店舗で見せることにより、割引等のサービスを受けることができるというものである。一般的なまちバルは短期間に集中して盛り上げようとするものが多い中、いばらきバルはまちバルのイベントを地域での回遊を高める機会として、その後もその機会を長期間継続させるような取り組みとなっている点がユニークである。

そして、参加店舗数が82店舗と函館西部地区バル街、

伊丹まちなかバルと比べ目立っている。2013年から2016年までの4年間については100店舗以上が参加しており、なかでも2015年は最多の119店舗が参加するという規模の大きさも特徴として挙げられる。

その他にもイベント期間中にまちバルとの「コラボイベント」として大学生のイベントが行われている点も特徴と言える。2019年のイベントでは、立命館大学の学生による複数のワークショップやゲームが楽しめるイベント「こどもBAR（バル）」と、追手門学院大学の学生による食育体験型店舗「バルlab.（ラボ）」が行われた。なお、このコラボイベントの参加には、いばらきバルのチケットを1枚使用することで参加できるようになっている。

4. 環境適応についての考察

ここまででまちバルイベントとしてのいばらきバルの特徴を確認してきたが、これらの特徴はどのような事業環境に影響を受け、どのような環境適応が起こったと考えられるのか。この点について考察していく。

（1）参加店舗の多さ

前述しているように2015年のいばらきバルは119店舗と参加する店舗数が多いイベントとなっている。店舗数に関する環境として人口を見ると、茨木市の人口は約28万人、それに比べて函館市は約25万人、伊丹市は約20万人と、先行事例として挙げている地域よりも茨木市の人口は多い。しかし、表1のように飲食店

表1 函館市・伊丹市・茨木市の比較

	函館市	伊丹市	茨木市	全国の市町村（平均）
飲食店数【事業所】	1,749	684	1,022	338
飲食店数（人口千人当たり）【店】	6.58	3.47	3.65	4.26
可住地面積1km ² 当たり人口密度【人】	2,071.3	7,875.3	5,937.9	1,384.1

政府統計の総合窓口（e-Stat）「都道府県・市区町村のすがた」¹⁰⁾をもとに筆者作成。

の数を見ると伊丹市と同程度であり、函館市と比べるとかなり小さな値である。このことから参加店舗の多さについては、事務局による積極的な募集活動や地域の飲食店がまちバルの実施に対して協力的であることのほか、イベントの方向性が特に影響している可能性が考えられる。4つのジャンルに関して記載した部分でも述べているが、いばらきバルのターゲットはまちバルが一般的にターゲットとする人々とは異なっている。様々な人々をターゲットにしていることにより、事業者も参加者も参加しやすいイベントとなっていると言えよう。

（2）4つのバル・ジャンル

茨木市の人口は先述している通りであるが、人口を

年齢別に見ると、また茨木市の特徴が確認できる。図5のように茨木市は伊丹市、函館市に比べ若い世代の人口が多い。前項で述べた様々なターゲットには子供連れの家族や未成年の若者が含めて考える価値が出てくる。4つのバル・ジャンルに分け、一般的なまちバルと同様に飲み歩き・食べ歩きを目的としたニーズも獲得しつつ、一般的なまちバルでは対象とならないボウリング場やゲームセンターなども含めて家族での参加や子供だけの参加も対象となっている点は、人口構成の特徴に合った変化と言える。また、これについては表2のように多くのお店で、お子様連れ歓迎のマークが付けられていることや、たばこの対応に関する情報が提供されている点も同じく人口構成の特徴に合ったところである。

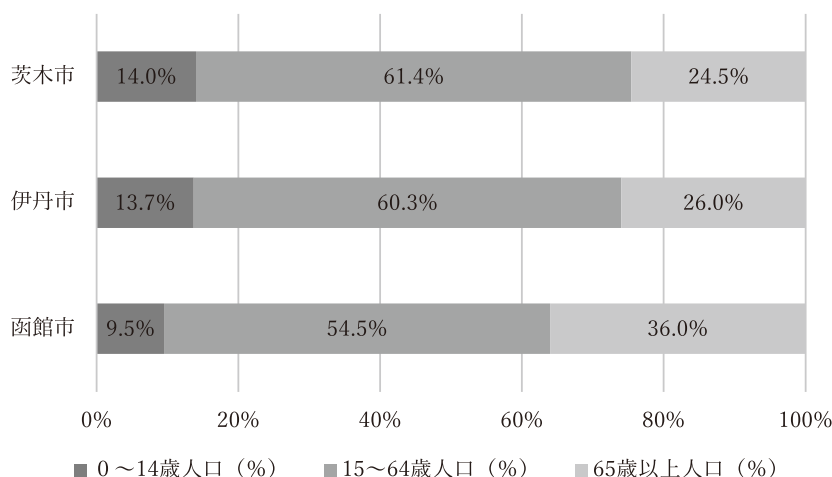


図5 人口構成の比較

総務省統計局「令和2年国勢調査」¹¹⁾より筆者作成。

表2 いばらきバル2019年と2022年の比較①

		飲食バル	カフェバル	お土産バル	ナイト・プレイバル	あとバル	クーポン・パス
2019年	店舗数	50	5	16	14	44	25
	割合	61.0%	6.1%	19.5%	17.1%	53.7%	30.5%
2022年	店舗数	36	13	37	9	-	30
	割合	46.2%	16.7%	47.4%	11.5%	-	38.5%

公式情報をもとに筆者作成。

表3 いばらきバル2019年と2022年の比較②

		お子様連れ 歓迎	禁煙	喫煙	分煙	時間別喫煙
2019年	店舗数	33	32	32	11	6
	割合	40.2%	39%	39%	13%	7%
2022年	店舗数	33	54	14	10	-
	割合	40%	69%	18%	13%	-

公式情報をもとに筆者作成。

(3) 子供向けイベント

これも(1)や(2)の内容と同様、茨木市の人口構成に関連する部分であるが、これはその点に加えて茨木市に大学が多いということも関係する。茨木市には現在5つの大学(キャンパス)があり、うち3大学がこれまでにいばらきバルと連携・協力している。先述のように2019年のイベントでは立命館が子供向けのイベントを行い、追手門学院大学が親子向けのイベントを行っている。近年、大学は地域連携や産学連携など、大学外との積極的なかわりを強めている。また、例えば茨木市では産学連携に関する補助金や大学と地域の連携に対する補助金などを出して連携事業を進めるなどの支援策も充実している。子供向けのイベントはこうした環境に合った取り組みであるとも言える。

(4) コロナ禍への対応

環境適応として最後に、いばらきバルのコロナ禍への対応についても述べておきたい。

先述しているようにコロナ禍により函館西部地区バ

ル街と伊丹まちなかバルは実施を見送った期間があるが、いばらきバルは開催を中止にせず、実施方法を変更して対応している。その方法が図6のかたちである。

チケット制からパスポート制に変更するとともに期間を10日間に伸ばして実施されている。短期間の実施による利用者の集中を避けるためである。また、期間を延ばすほかに感染対策として、参加店舗に対し大阪府の「感染防止認証ゴールドステッカー」を取得することを推奨したほか、WEB予約を導入するなどの対応が取られた(一部の店舗)。また、店内飲食ではなくバルメニューをテイクアウト商品に変える店舗も増え、表1のお土産バルの数値からわかるように割合が大幅に増加した。以上のような取り組みによりコロナ禍であっても継続しての実施を実現させたのである。なお、コロナ禍の実施については感染対策という点のほか、いばらきバルがもともとのお土産バルというものを設けていることや、飲酒を中心としたイベントではなかった点も大きく影響していることも述べておきたい。

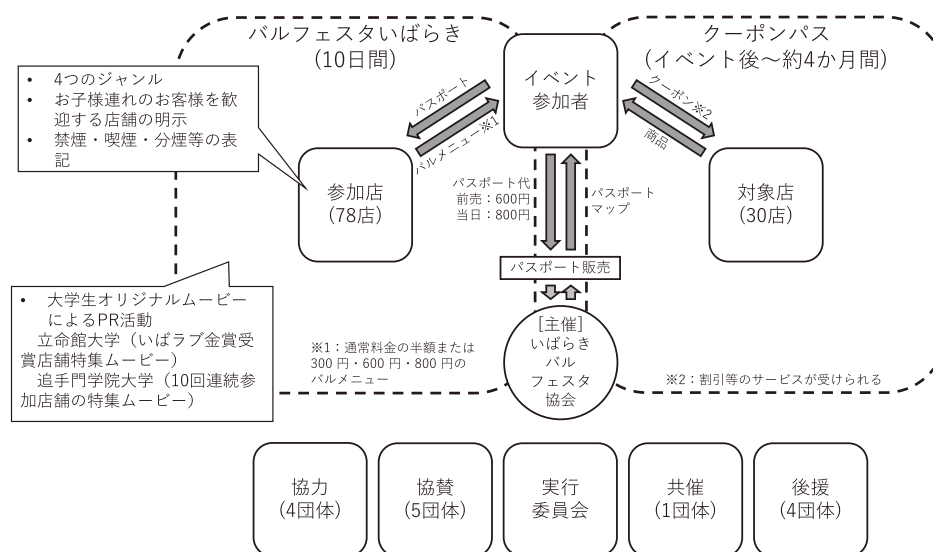


図6 バルフェスタいばらきの事業モデル(2022年「第11回」)

公式ガイドブック¹²⁾ およびインタビュー内容をもとに筆者作成。

5. おわりに

まちバルについてはスペインのバル文化がもとになっていることもあり、ピンチョスを肴にお酒を楽しむというスタイルが基本となっている。函館西部地区バル街はその本場のバル街を再現しようと始められたという背景から、事業モデルが構築されている。伊丹バルについては、その函館西部地区バル街の事業モデル参考として地域の資源である地酒を活かした事業モデルとなっている。いばらきバルについては、特に茨木市の人口構成の特徴といばらきバルの実施内容が適応していることがわかった。

まちバルは多くの地域で行われるようになったが、地域ごとに資源や環境は様々である。まちバルが多くの地域で実施され継続される要因には、まちバルという事業モデルの環境適応性の高さがあると指摘できよう。

そして、コロナ禍のため、まちバルは開催中止とするところも多かったが、再開するところも出てきている。2019年より開催を見送ってきた函館西部地区バル街も再開が予定されている¹³⁾。今後、多くの地域でまちバルが再開されていくことを期待したい。

謝辞

本研究の調査にあたり、インタビューにご協力してくださった「いばらきバルフェスタ協会」の皆様には大変お世話になりました。この場をお借りして、深くお礼申し上げます。

付記

本稿は「追手門学院大学プロジェクト型共同研究奨励費制度（2020年度～2022年度）」に採択された「質的食資源と地域振興に関する研究」の研究成果の一部である。

【参考文献】

- 1) 葉山幹恭 (2022) 「MICE観光における「まちバル」方式採用の有効性—サン・セバスチャンにおける実施事例からの考察—」日本観光研究学会全国大会学術論文集, 37, pp.105-109
- 2) 函館西部地区バル街ホームページ (<https://www.bar-gai.com/>) 閲覧: 2023.2.25
- 3) 函館西部地区バル街実行委員会 (2021) 『バル街からの手紙 Vol.3』 ([https://www.bar-gai.com/wp-](https://www.bar-gai.com/wp-content/uploads/bargai_tegami_vol3.pdf)

[content/uploads/bargai_tegami_vol3.pdf](https://www.bar-gai.com/wp-content/uploads/bargai_tegami_vol3.pdf))

- 4) 伊丹まちなかバルホームページ (<https://itamibar.com/>) 閲覧: 2023.2.25
- 5) 伊丹市観光物産協会ホームページ「伊丹は清酒発祥の地」(<http://itami-kankou.com/itami>) 閲覧: 2023.2.25
- 6) 小西酒造株式会社ホームページ (<https://www.konishi.co.jp/>) 閲覧: 2023.2.25
- 7) 伊丹オトラクホームページ「伊丹オトラクな一日～気分は流しのミュージシャン～」(<https://itami-otoraku.com/ichinichi>) 閲覧: 2023.2.25
- 8) 角谷嘉則 (2016):「函館西部地区バル街」から「伊丹まちなかバル」への情報提供とその経路, 流通研究, 19(1), pp.67-82
- 9) いばらきバルフェスタ協会「いばらきバル公式ガイドブック (2019)」
- 10) 政府統計の総合窓口 (e-Stat)「都道府県・市区町村のすがた」(<https://www.e-stat.go.jp/>) 最終更新日: 2023.2.21
- 11) 総務省総務省統計局「令和2年国勢調査」
- 12) いばらきバルフェスタ協会「いばらきバル公式ガイドブック (2022)」
- 13) 函館西部地区バル街ホームページ「2023年春バルを5月20日開催で」(<https://www.bar-gai.com/230201-2/>) 閲覧: 2023.2.25